

# 言語の社会性について

## ——ソシユールと時枝から——

---

高木敬生 博士課程後期 3 年

## 0. はじめに

時枝誠記は1941年その著書『国語学原論』で、言語構成観に基づく西洋言語学とその影響を受けた「新国語学」を批判的に再検討し、博士論文以来成熟させてきた新たな言語理論「言語過程説」の構想を打ち出した。

この言語理論は国語学の領野において、時枝文法をして日本四大文法（あるいは三大文法）の一つと数えさせるなど日本語文法における彼の立場を堅固たるものとしたのみならず、日本語文法において現在も進行中である論争、主語論争（日本語に主語は必要か）において一つの勢力を成す三上章の理論に影響を与えているなど、彼の日本語研究における業績の価値は色褪せるどころか、さらなる検討を要求してくるように思われる。

また『国語学原論』の中では、西欧言語学の代表としてソシユール学説が批判されている。しかし国語学の評価とは対象的に言語学あるいはソシユール研究の分野からの時枝学説の評価はおおよそ芳しくないものである。

時枝は『国語学原論』において、国語学の新天地を開拓するという大望を抱き、そのために当時主流であったソシユール（および西洋言語学や、それを受容するのみで「真の自律的展開」、「学問する」態度）を持たなかった国語学を批判すると考えられている。その批判的精神は、1949年、国語学者佐藤喜代治による論文「言語過程説についての疑問」（『国語学』第二輯）をその発端に時枝論争と呼ばれる論争を巻き起こし、1957年の服部四郎との応酬（服部「言語過程説について」、時枝「服部四郎教授の『言語過程説について』を読む」、服部「ソシユールの langue と言語過程説」）によって一旦の決着をみるまでおおよそ10年弱にわたるものとなった。結果としては、時枝はソシユールの理論を正確に理解しておらずその理論を消化しきれていないという欠陥が明らかになり彼のソシユール批判もほとんど評価されていない。このことについてはもはや先例を引くまでもないだろう。その「誤読」の原因は、ソシユールの『一般言語学講義』の訳者であり、日本統治下における京城帝国大学（現ソウル大学）の同僚でもあった小林英夫が、1978年の雑誌『言語』に掲載した辛辣な言葉が象徴

するように、原文を当たらなかったため、すなわち語学的な問題と認識されているのである。

かれのソシユール理解なるものは、多くのばあい「原論<sup>1)</sup>」の初めの数章を読んでえた印象をもとにして成立したものであり、けっして全巻を読破した上これを構造的に把握して成ったものではないのである。かれは暁星中学の出身ではあったが、大学を出たころはその仏語力の大半を喪失しており、もっぱらわたしの訳書を通じて泰西の言語学説を吸収することを努めていたようである。(小林英夫「日本におけるソシユールの影響」 p.48)

そもそも時枝に限らず当時の研究者はソシユールの用語を現代ほどに深く理解できてはいなかったと考えるべきである。時枝のソシユール理解を批判した服部にしても、その「実在体」の理解において大橋保夫から批判されている<sup>2)</sup>のである。現代においてソシユールの用語理解は丸山圭三郎以降の研究者たちが原資料等にあたりながら精査してきた結果によってるのであって、その丸山の『ソシユールの思想』が1981年に出版されるのであるから、時枝論争は終わりだけ見てもおおよそ25年前にあたる。時枝の誤読についてはソシユール理解を深めるための試金石としての価値はあっても、誤読を理由にその説全般を比較検討の価値がないとすることはできないのではないだろうか。

こうした観点から、本稿は時枝のソシユール批判を再検討し、その批判の原因が単純に西欧言語学の侵攻に対する国粹主義としての抵抗だったのではなく、時枝は学說的観点からソシユールと対立せざるを得なかったということを指摘する。そして、その理由を確認することで見えてくる時枝の言語過程説とソシユール理論の関係を今一度見直すことが目的である。

論の展開としては、まず時枝によるソシユール批判を、時枝の問題意識の観点から再検証する。次にそこから見出される「社会」という概念をもとに、両者の理論の言語という対象に対する観点の違いを比較検討する。さらには、両者が異なる観点から現象あるいは行為として言語という対象

を考察しながらも、実際には両者が両立不可能ではないのではないかという立場から、それぞれを総合し得る可能性を探ろうとするものである。

## 1. 時枝のソシユール批判検証

### (1) 時枝の問題意識

時枝は「言語とは何ぞや?」という問題意識を常に持ち続けた研究者である。これは1924年に提出された彼の卒業論文に述べられている言葉でありソシユールの『一般言語学講義』からくるものではない。

たしかに時枝がこの問題意識にたどり着くには、西洋の言語学者の影響があった。しかし、彼のこの意識が表に出されたのは、『国語学原論』(1941年)は言うまでもなく、『一般言語学講義』の訳者として知られる小林英夫と同僚となった京城大学への赴任(1927年)にも先立っている。時枝の言葉によると、彼がソシユールを知ったのは1924年に神保格による紹介であって、それから原著を手にし、東京から朝鮮へと場所は変わりながらも読解と批評に励んでいたという(cf.『国語学への道』、p.90)。つまりこれはソシユールではなくイエスベルセンの『言語』の影響だと考えるべきなのである。彼は「私はイエスベルセン氏と共に「言語の本質は何か」の問を発することから始めようとした」(『国語学への道』p.33)のであり、イエスベルセンの影響はたびたび述べられている。これは当時の言語学者と異なり、時枝がソシユールのラング理論あるいは構成的言語観に対して距離を置いた一因であると思われる。つまり、この言語の本質について問いに対し、ソシユールの『言語学講義』からの影響を受ける以前に、時枝には独力でそれを検討する機会を持っていたのである。結果、辿り着いた解決が言語過程説であり、すなわち言語をある人間の行為としてみる研究、さらに言えば言語生活を対象とする研究であった。

言語は、行為であり、活動であり、生活である。それは、次の等式によって示される。

言語＝言語行為＝言語活動＝言語生活

右の等式の示すものは、言語があつて、それとは別に言語生活があるという考えを否定することを意味するのである。(『国語学原論続篇』pp.28-29)

この研究の課題は「言語」という対象を人間の生活の一部として、前田英樹の言葉を借りれば「有用な行為」として、扱うことであつた。そのためには西洋言語学的な「ラング」を前提とした「具体的な経験から離れることになる」方法ではなく、言語行為という具体的な経験に基づいた心的過程として扱う方法が必要となる。

[具体的な経験に基礎を置く言語研究] そこでは、言語は客体的な思想内容を音声に結合し、文字に記載する主体的な心的作用として、又音声より思想内容を理解し、或は文字より音声及び思想内容を理解する心的作用として把握されているのである。換言すれば、言語は精神的実体でなくして、人間行為の一形式として見られているのである。(『言語本質論』、pp.365-366)

この際の時枝の用語「言語」とは、ソシユールの差異からなる辞項の体系としてのラングではなく、ソシユールの用語であればパロールの回路全体を示していると考えられる。「ソシユールはその研究の出発点において、「言循環」(le circuit de la parole [パロールの回路]) の名において、個人間の会話を観察の対象としたことは正しいことであつた」(「言語の社会性について」、p.77) とパロールの回路を観察することには一定の理解を示すが、「言語を、それと関連する人間行為全体から切離して、専ら言語自体の構造を抽象的に観察したに止まった」(『国語学原論続篇』、pp.11-12) ことを批判するのである。時枝の理論がそれ以前の国語学や西欧の言語学を批判することから始まった点について、彼自身、自分の学問の出発点を批評においている。

私の学問の出発点は、批評といふことから始められたと云つてもよい

位である。私の批評の一つの対象は、ヨーロッパの近代言語学の学説であり、他の一つは、日本の旧来の国語研究の理論である。わけても、日本の旧来の研究に対しては、明治以後の批評を不当なものとし、これを正当に評価するには、どうしたならばよいかを考へた。『国語学への道』、p.135)

時枝は明治以来の西欧言語学の影響を受け言語を言語生活から切り離そうとする構成的言語観を批判し、旧来のつまり江戸期以前の国語学者たちによる言語生活に則した研究の可能性を再評価しようとしたのである。

## (2) 言語構成説批判

さて、言語と言語生活とを切り離す考え方は、時枝の生きた時代に国語学に大きな影響を与えた西洋言語学、特に昭和以降に隆盛を誇ったソシユール理論に由来すると読み取ることができる。言語過程説はこうした言語構成説（構成的言語観、言語実体観）に対するアンチテーゼとしての側面を持っていることは、後者を客体的言語学としたときに時枝自身が前者を主体的言語学と称することからも明らかである。時枝は次のように自らの言語過程説の言語概念が言語構成説の言語概念と対立せねばならなかったことを述べている。

言語過程説が、言語を、〈人間の表現・理解の行為である〉と規定する時、先づ対決を迫られたのは、過程説とは全く異なった仮説理論である言語実体観であります。それは、近代言語学の根本理論で、言語を、〈音韻と意味との結合体である〉とする考へ方であります。〔言語過程説の成立とその展開〕、p.49)

ただし、これを即座にソシユール理論に対する批判として捉えることはできるだろうか。確かにこの言語を人間から切り離して対象とする方法はもちろんソシユールにも見られるものであって、そうしたソシユール理論は確かに時枝の活躍した時代における研究法の一つの潮流をなし、多大な影

響力を保持していたと考えられる。たとえば時枝が上田万年の学生であった際にその国語学研究室の助教をしていた（つまり時枝とほぼ同じ時代の国語学を経験している）橋本進吉の次の言葉からもうかがえる。

言語は文化現象の一つであって、音（或場合には文字も）を以て思想感情を他人に通ずるものである。精神の働きが主になっては居るが、物理的（音及び文字）及び生理的（音を発し、字を書く筋肉の運動）の要素も含んでいる。また言語は社会的のものであって、社会生活の中から生れ、社会生活に便ずる為に用いられるものである。又言語は歴史のもので前代から後代へと伝わって行くものである。これ等の性質を考慮しないでは、言語上の現象は説明することが出来ない場合が多い。かようにして、国語学は文化科学であり、社会科学であり、又歴史科学である。（橋本進吉『國語學概論』、p.7）

この橋本の言及は、『一般言語学講義』におけるソシユール理論の影響が明らかに見て取れる。つまり時枝の批判する言語と言語生活とを切り離れた見地にたっているのである<sup>3)</sup>。こうした観点を時枝は構成的言語観と呼び、言語を自然科学的な対象すなわち「もの」として研究しようというこの言語観が、言語という行為の主体であるところの人間を全く顧みない言語観であることを指摘し、「こと」としての言語すなわち言語生活を対象にすることで「言語において、人間を取り戻そうとする」（『国語学原論続篇』、p.20）言語過程説を唱えたのである。またソシユール理論の評価については神保格から「欧州言語学の最新学説」として紹介されたと時枝も述べている。このことからソシユールを批判の対象に選ぶということもあり得ないではないように思われる。

しかしながら、こうした言語と実際の言語実践とを切り離す観点、すなわち「構成的言語観」はソシユールに始まったものでは決してない。たとえばヘルマン・パウルの『言語史原理』において「言語が歴史的に成立したこと」という言葉は言語が個々人を超えてそれ自体として変化していく歴史的対象と捉えられた結果であるし、「言語の個人的な活用」「一般的な

言語の慣用に対する個人の態度」というのも個人に対する言語の外在を暗に示していると考えられる。また、シュライヒャーのような言語を生物になぞらえる言語有機体説も構成的言語観の一種として挙げられるだろう。さらに古典ギリシャ時代の『クラテュロス』にまで遡れるかもしれない。またソシュールが「昭和以後の国語学に甚大な影響を及ぼした」(『国語学原論続篇』、p.17)としても、時枝がイエスベルセンの影響からその言語理論の基礎を築こうとしていたのはそれに先立っていたことは前に見た。つまり、ソシュール学説が、俗な言い方でいえば、一つの「流行」を成していたから、その理論を単純に構成的言語観の代表としてとりあげたというには根拠として弱いように思われるのである。時枝自身も言語構成説がソシュール独自のものではないという見方を示している。

この考へ方に従ふならば、言語は、人間の外に存在する、一の実体的なものと考へられるのは当然で、ソシュールは、これを〈ラング〉と呼んで居りますが、この考へ方はソシュール独自のものといふよりは、近代言語学の本来的なものと見ることが出来ます。(「言語過程説の成立とその展開」、p.49)

となれば、あえてソシュールを取り上げるには他にも理由があるはずだと考えるべきであろう。その理由とは何か。それについての考察を進めていこう。

### (3) 言語の社会性について

一つの根拠として考え得るのが、ソシュール理論におけるラングの性質、すなわち社会性である。時枝が理論展開する上で、言語を人間の行為すなわち意思伝達過程と見たときに、それは社会的行為であるとされる。ここに社会性を主張するに際して、時枝が批判するのが言語をデュルケームの社会的事実として見るフランス社会言語学派(メイエ、ヴァンドリエス)であり、同様にシュールもまたラングを社会的事実として見出そうとしたものだと理解されるが為に『国語学原論』において名指しで批判されるに



いたったのではないだろうか。

ソシユールが、言語活動の中に、聴覚映像と概念との結合した心的実在体である「ラング」を求めようとした意図の中には、混質的なものの中に、それ自身一体である単位的要素を求めようとしたことと同時に、デュルケームの社会学における社会的事実（fait social）に相当するものを見出そうとする努力があったであろう（cf.「言語の社会性について」、p.77）

つまり、ソシユールが言語構成説を唱えたとみなされることは時枝が批判する大前提ではあるが、その批判が具体的にどこを指しているのかという点は実は言語の社会性の捉え方にあるのではないだろうか。

## II. 社会性についての考察

### （1）ラングの社会性：社会的事実としてのラングとは何か

たとえば『講義』にはラングをパロールに対して社会的であり本質的であると表現する箇所がある。

ラングをパロールから切り離すことで、同時に以下のものを切り離すのである： 1. 社会的なものを個人的なものから； 2. 本質的なものを副次的で多かれ少なかれ偶然的なものから（『一般言語学講義 エングラー校訂版』、p.41）<sup>4)</sup>

時枝がソシユール理論をラングが本質的で社会的なものと規定しながら、それを社会的事実として捉え主体の行為という側面を排除していると理解し且つ批判するのはこの点の読解によるところが大きいとおもわれる。

ソシユールは、この循環過程を以て、精神、生理、物理的要素の混

在したものとみて、このような混質的なものは、科学の対象とすることが出来ないものであると考へた。そこで、この混質的なものの中に、等質的にして、本質的なものとして、概念と聴覚映像との結合から成る心的実在体としての「ラング」を設定するのである。（「言語の社会性について」、p.77）

こうして抽出されるラングは「言語活動の本質的部分であると同時に、言語集団に共通したものとして、デュルケーム的社会主义事实の概念に近似し、これに「社会的」といふ修飾語が冠せらるることとなった」（「言語の社会性について」、p.77）と理解されている。この「社会的」とは二つの意味で解されている。ひとつが「社会的交渉の結果、同一社会に共通なものとして成立したものである」という点、もうひとつがパロールの理解のため、すなわち「思想交換の媒体」としての点である。時枝によれば、ソシュール理論において後者の意味は強調されず、前者の意味での社会性のみがラングの社会性として認められたというのである。こうしたラングについて「個人を超越する外在性と、個人を拘束する拘束性においてその社会性が認められた」（「言語の社会性について」、p.78）と述べている。これはデュルケームの社会的事実の定義とほぼ同意である。デュルケームは以下のように社会的事実を定義する。

社会的事実とは、「中略」、外的な拘束力を個人の上に行使しうるような行為様式である。さらに言えば、一定の社会の広がりの中で、固有の存在を持ちながらも、一般的であり、個人における様々な現れ manifestations individuelles とは独立した行為様式である。（Règles, p.19）

この『社会学的方法の規準』における定義はそのままソシュールのラング概念にもあてはめることが可能だということは、第2回国際言語学者会議における W.ドロシェフスキによる報告「社会学と言語学：デュルケームとソシュール」（1931年）及び彼の論文「社会学と言語学の関係についてのいくつかの指摘：ソシュールとデュルケーム」（1933年）以来、多数の

言語学者、特にソシユール理論を考察する者の間ではおおよそ認められてきたことである。E. F. K.ケルナーは「言語学史の多くの研究者が、ソシユールの言語理論は事実、本質的にデュルケーム的であると結論づけてきた」(Koerner, 1973, p.52) とし、E.コセリウは「ソシユールは \_\_デュルケームの名は一度として『講義』に登場しないにもかかわらず \_\_デュルケームの社会的事実なる教説を受け入れてその細部に至るまで、また、その言いまわしに至るまで追随している」(『うつりゆくこそことばなれ』 p.25) とドロシェフスキの指摘する影響関係をそのまま受容しながら、デュルケームの「社会的事実」の概念が学問的土台としてふさわしくない概念であって、それはすなわち、ソシユールの「言語」概念が「他の諸分野によって展開された、効力の疑わしい概念の中に、無邪気に足場を作る」(同前、pp.26-27) ことで危険を冒しているという批判をしている。またタルドとデュルケーム両者の思想を混合したと見る研究者もいる。G.ムーナンはソシユールと哲学との関連について言及し、ソシユールが論理学と言語学との関係を回復させたと考えられるのは、ソシユールの思想の原動力が哲学的記号理論の考察と「たしかにデュルケームの思想、もしかするとタルドの思想」(*Saussure ou le structuraliste sans le savoir*, p.10) であるという限りにおいてであると主張する。A.H.スリュサレヴァは「強制の法則 (É.デュルケーム) や模倣の法則 (G.タルド) ——フランスの社会学者たちの意見では、これらが社会的事実を決定する——に対抗して、ソシユールは社会現象としての言語を支配する伝統の法則を提唱している」(『現代言語学とソシユール理論 改訂版』 p.176) とデュルケームの理論だけでなくタルドの理論も取り入れ<sup>5)</sup>、両者を総合して新しい理論を展開したのだという立場をとっている。時枝がソシユールのラング概念をデュルケームの社会的事実と同一視したこと自体には、当時ソシユールの『一般言語学講義』しか手に入らなかったこと、またソシユール研究自体がその萌芽的状态にすぎなかった<sup>6)</sup> ことを考えれば止むを得ないことであると言えるだろう。むしろ時枝の理論は、一方で大久保忠利の「個人心理学的である」という批判を受けながらも、『一般言語学講義』におけるソシユール理論の欠点、すなわち後に構造主義に対すると共にソシユール理論に対しても為される動態性

の欠如を指摘し、その静態性への批判を先取りしていると考えられるのではないか。以下に時枝の社会概念を明らかにしつつ時枝が「フランス言語社会学」に対して為した静態性への批判を取り上げてみよう。

## （２）時枝理論（言語過程説）における言語の社会性とは何か

時枝は自らの理論をどのようなものとして社会的であると述べるのだろうか。大久保の批判に対する時枝の反論をもとに、考察してみよう。先にも見たように時枝はその『国語学原論』から一貫してソシュールがラングをデュルケームの意味での社会的事実として捉えた点について批判しており、そうした観点を持っていることが、言語過程説の言語主体の主張が個人心理学的であるという誤解につながると考える。

我が国におけるソシュール言語学の継承者たちは、ソシュールが、言語は社会的所産であると云ったことだけから、この言語学が言語の社会性を余すところなく究明しているであろうというような錯覚に陥ってはいしないであろうか。そのような錯覚から、言語主体を強調する言語過程説が個人心理学的であり、言語の社会性を無視した言語理論で、ソシュール言語学よりも後退したものであるという大久保氏の批判のようなものも出て来るわけである。（「言語の社会性について」、p.78）

そうして時枝は自らの言語観が、デュルケームの社会概念に対するタルド、ジンメル、和辻哲郎らの社会概念と同じ地盤であることを、ソシュール以降の言語社会学を批判することで暗に示すのである。

時枝は言語を行為ととらえる観点に立つのであって、そこから言語が社会的であるとは人間行為が社会的であるとされるのと根拠を同じくするものだとし、そこから導かれるのは対人関係を構築することすなわち社会的であるということである。さらに言えば人間行為全般においては社会的ではない行為（たとえば「たまに入って木の実を拾い、飢をしのぐ」といった行為）があり、常に社会的であるとは言えないのだが、言語行為に関し

ては、そこに常に対人関係が予想される以上、本質的に社会的な行為であるということになるのである。時枝はソシュールらの社会概念と自らの社会概念との差異を次のように述べている。

フランス言語社会学においては、社会組織の反映として、個人がただ受動的に登録する「ラング」を社会的所産としてみるのであるが、ここ[言語過程説]では、時々刻々に我々の対人関係を左右する主体的な言語表現において言語の社会性をみようとするのである。前者は静的な社会的反映の観察であるのに対して、後者は動的な社会的機能の観察を意味するのである。〔言語の社会性について〕、p.80)

この点においても、社会的反映物という「もの」としてのラングではなく、対人関係を為し社会を形成する言語行為という「こと」を対象として観察するという時枝の立場が強く主張されていると考えられる。こうして言語が過程であると考え、その具体的な過程を表現過程・空間伝達過程・理解過程からなる一連の行為とする時枝は、この過程が言語生活として他の生活と様々な機能的関係を構成するとした。特に社会性については対人関係を構成する機能を社会的機能としている。この機能については後にまた確認せねばならない。しかし、まずは時枝の批判と類似した批判を確認してみることしよう。

### (3) 静態性批判

先に時枝の批判がソシュール理論の静態性に対する批判の先取りという点を指摘した。次はソシュール理論の拡散に続いて起こった静態性に対する批判を確認してみよう。

ソシュール理論の応用が大いに成果を収めたのは、その直系に当たるジュネーヴ学派でもイェルムスレウに代表されるコペンハーゲン学派でもなく、まずもってマテジウスやヤーコブソンに代表されるプラハ学派の音韻論の分野であろう。この学派による音韻体系の理論は、すなわち音素はそれ自体が絶対的な音の実体に基礎を置くのではなく、他の音素との共存に

よりあるいは口の開きあるいは舌の位置などから相対的に差異化されるものとした。そうした差異すなわち弁別の特徴の体系が束となることで各音素が成り立っているのだとするのである。この体系という概念は構造と呼び名を変えてヤーコブソンから人類学者のレヴィ＝ストロースへ、さらには様々な分野へと応用されることで構造主義という思想のムーブメントを巻き起こすにいった。

しかしながら、この体系あるいは構造という概念の流行は、言語学においてはラングという対象のみに目を向け、ラングを変化させるところの語る主体におけるそうした主体性が喪失しているものとして見られるようになる。たとえばヴァレリーは言語学が言説（ディスクール）や言表行為（エノンシアシオン）の観点を欠いていると指摘し、バンヴェニストなどはソシユール言語学を乗り越えるために主体の行為としての言説や言表行為を重視するようになったとされる（cf.『ソシユール小辞典』、pp.147-151）。これは体系の概念こそ共通していないものの、時枝が西洋の言語学を批判する際の批判と同根にあるのではないだろうか。すなわち、立川健二の言葉を借りれば、語る主体における「主観的分析」からラングの分析が始まりながら結局のところ語る主体というものはそこでの「語る」役割を与えられず、ただただ自らに課せられた社会的産物としてのラング、「スタティックな差異体系としての「ラング」」（『〈力〉の思想家ソシユール』、p.80）を眺めるだけの立場に置かれているという点を批判するのであり。時枝もバンヴェニスト同様に語る主体を取り戻すために言語を行為として考察する見地を打ち出したのではないだろうか。

#### （４）ラング概念と言語過程説の共存

さて、時枝は一貫してソシユールのラング概念に当たる社会的産物として言語を扱おうという言語構成説を否定するのだが、そもそもラングのような基本的単位がない時枝の理論は対人関係を為すところの言語生活を扱うとしてもどこにその拠り所を置くのであろうか。その点は大きな問題となるのではないだろうか。先ずは時枝の理論ではソシユールのラング概念の不在を解決できているのか、検証する必要があるだろう。

時枝の言語過程はソシユールの発話の回路とほぼ同様の形式をとっていると言ってよいだろう。ただし、ソシユールは話手と聴手の二人を置きその間で記号がやり取りされるのに対し、時枝は、言語の存在条件として「主体」、「場面」、「素材」の三要素を挙げ、「言語は、誰（主体）かが、誰（場面）かに、何物（素材）かについて語ることによって成立するものである」（『国語学原論上』、p.57）とした。

「主体」とはまさに「語る処の主体」でありソシユールでいえば話者を指す。

「場面」は空間的な意味での場所とそれを満たす内容およびそれらを志向する主体の主観的意識（時枝は「態度、気分、感情」とするがそもそも場面となるところのものに対する主体の意識であるのだからより広い意味で捉えられるべきであろう）をも含むものである。さらに場面の特徴として聴手も含むことが挙げられるだろう。聴手を志向した場合の何らかの意識がそこに含まれるのである。つまりこの聴手とはあくまでも場面の一部としての聴手であり、言語を受容するいわば聴く主体とは異なるのである。聴手を主体として見ることは翻って話手を場面の一部とみることになると考えられる発話の回路にはない要素である。また時枝が言語において社会概念としてみるものが主体の表現行為に対する場面の影響であると言える。

さらに「素材」とはパロールの回路においては記号に当たるものであるが、この素材とは言語の表わす「表象、概念、事物」であって、時枝によれば「構成主義的言語観」における「意義或は意味の名に於いて、音声形式に対応するもの」とされる。

これらの要素はそれぞれ言語の外にあるものとされ、そのことに則すれば、時枝の言語とはソシユールの用語でいうところのシニフィアン、あるいはその組み合わせとしてのパロールということが出来るであろう<sup>7)</sup>。つまり時枝はパロール生成の過程を対象としていると考えられる。しかしながら、パロールとはラングがあって初めて生成されるものだと考えることができる。時枝はその過程を、主体が素材を伝達可能な形式に変換する機能、すなわち概念作用と称するのみであり、ラング的な何かの規準を指摘

することはない。これはすなわちソシユール理論における言語記号の恣意性の欠如であり、ソシユールが批判した素朴な言語名称目録観に留まっていることが原因だと考えられる。なぜなら時枝は、概念過程において一つの音声が決定的概念と個別概念とを別々に表わすことがあるとして音声と概念との結びつきが恣意的であることを理解しているかのように見えるかもしれないが、結局、彼の例えに挙げるのは一般的であれ個別的であれ／イヌ／は「犬」を表し、／サクラ／は「桜」を表すのである。時枝に体系概念が欠如したのもこの恣意性の概念を理解していなかったことに帰結する問題であろう。言語記号における聴覚映像と概念との内的関係が必然的ではないということは、ソシユール以来の研究によって言語の特性の一つとして認められるべきものであるように思われる。となれば、その観点を欠いた概念過程とはやはり見直されるべきであろう。その概念過程を補完するためにソシユールのラング概念は言語過程説と共存できる概念なのではないだろうか。

### 3. まとめ

以上見てきたように、時枝のソシユール批判の根底には言語の社会性についての意識があり、時枝における社会概念はデュルケーム的な社会的事実の概念ではなく、人間関係を成立させる社会的行為としての概念であった。

時枝の言語過程説はその理論の形成において人間関係を成立させる行為の過程という意識を持ち、それが彼にとっての言語の本質であった。この理論はソシユールのラング理論に対して、パロールの理論でありまたバンヴェニストのディスクールの理論を先取りしていたとみることができるのではないかと指摘した。

しかしながら、時枝には差異の体系としての概念がなく、その根本がソシユール理論における恣意性の無理解であったことをみた。この恣意性を言語過程説に取り入れなければ主体による概念過程は成立しないであろう。つまるところ、概念過程はソシユールのラング概念を導入せねば言語



記号が恣意的でありながらもあるルールに基づいて用いられていることが説明できないのである。

しかしながら、その点を考慮すれば時枝の理論は、構造主義以来の静態性に対する批判とその乗り越えとしてのバンヴェニストらによって提唱される言語活動における言語主体の行為としての側面、動態としての側面の研究を先取りしていたともいえるのではないだろうか。

#### 注

- 1) 小林英夫訳『言語学原論』岡書院、のちに出版社を岩波書店に変え、また『一般言語学講義』と題を改められる。
- 2) 大橋保夫 (1973) 「ソシュールと日本」、pp.2-15
- 3) 時枝がこうした観点の違いから橋本の学説（いわゆる橋本文法）に対して批判的であることはすでに前田英樹によって指摘されている。Cf.前田英樹「時枝誠記のプラグマティズム」 pp.305-306（時枝誠記『国語学原論続篇』、pp.293-308）
- 4) 補足事項：『講義』においては、ラングはパロールから切り離されるが、ソシュールの本来の講義では、「ランゲージュの能力（*faculté du langage*）から」（D6, SM III 96, 241 / III C 13）、あるいは「ランゲージュから」切り離されている。時枝はパロールをパロールの回路自体（ランゲージュの図式化されたもの）と理解したこと（cf.「言語の社会性について」）が結果としてソシュールの本来の説にのっとったものとなっている。
- 5) この指摘は、ドロシェフスキが言語（ラング, *langue*）概念はデュルケームの影響を受けており、言（パロール, *parole*）概念はG.タルドの影響を受けているとしたこと（cf. Doroszewski, 1969[1933], p.108）に由来すると考えられる。
- 6) たとえばソシュールの手稿が発見されるのは1955年であるし、ゴデルによる『一般言語学講義原資料』が出版されたのは1957年である。
- 7) もちろん時枝の言語外に素材としてあらかじめ何らかの「もの」を想定することはソシュール言語学の観点とは決して相容れないものである。前田英樹はソシュールと時枝との単位(差異／文)の扱い方の違いを指摘し、ソシュールは「語る主体が自己の内部に生じさせる差異そのもの」を扱い時枝は「言語主体による意識的で能動的な「加工変形」の活動がある」という違いを指摘している。（cf.前田英樹「ソシュールとメ言語過程説」）

## 参考文献

- Doroszewski, Witold, 1969[1933], « Quelques remarques sur les rapports de la sociologie et de la linguistique : É. Durkheim et F. de Saussure », in *Essais sur le langage*, Paris; Minuit (pp.97-109)
- 1972[1933], « Sociologie et Linguistique (Durkheim et Saussure) : Communication », in *Actes du Deuxième Congrès International de Linguistes, Genève 25-29 Aout 1931*, Nendeln/Liechtenstein; Kraus Reprint (pp.146-148) Koerner, 1973
- Durkheim, Émile, 1895, *Les règles de la méthode sociologique* [=Règles], 7e éd., Paris; Librairie Félix Algan
- エウジェニオ・コセリウ, 1973, 田中克彦 かめいたかし訳, 『うつりゆくこそことばなれ—サングロニー・ディアクロニー・ヒストリア』, クロノス
- O.イエスベルセン, 1958, 市河三喜, 神保格共訳 『言語：その本質・発達及び起源』
- 小林英夫, 1978, 「日本におけるソシユールの影響」, 『月刊言語』 7(3), pp.44-49
- 橋本進吉, 1970, 『橋本進吉博士著作集』, 岩波書店
- 1978[1959], 「文法のご案内」, 服部四郎他編, 『日本の言語学 第3巻 文法 I』, 大修館書店, pp.21-32
- 服部四郎, 1957, 「言語過程説について」, 『國語國文』 26(1), pp.1-18, 中央図書出版社
- 1958, 「ソシユールの langue と言語過程説」, 『言語研究』 (32), pp.1-42, ヘルマン・パウエル, 1993[1965], 福本喜之助訳, 『言語史原理』, 講談社
- 前田英樹, 1978, 「ソシユールと“言語過程説”」, 『月刊言語』 7(3), pp.50-55, 大修館書店
- 丸山圭三郎, 1981, 『ソシユールの思想』, 岩波書店
- 丸山圭三郎 (編), 1985, 『ソシユール小辞典』, 大修館書店
- Mounin, Georges, 1968, *Saussure ou le structuraliste sans le savoir*, Paris; Éditions Seghers
- 大橋保夫, 1973, 「ソシユールと日本」, 『みすず』 15 卷 8 号, pp.2-15
- 佐藤喜代治, 1949, 「言語過程説についての疑問」, 『国語学』 (2), pp.17-29, 国語学会
- Saussure, Ferdinand de, 1989[1968], *Cours de Linguistique Générale, éd. critique par Rudolf Éngler* [=CLG(É)], t.1, Wiesbaden; Otto Harrassowitz

- 2005[1967], *Cours de Linguistique Générale*, publié par Charles Bailly et Albert Séchehaye avec la collaboration de Albert Riedlinger, éd. critique préparée par Tullio de Mauro, postface de Louis-Jean Calvet, Paris; Éditions Payot & Rivages
- 1928, 小林英夫訳, 『言語学原論』, 岡書院
- 1997[1940], 小林英夫訳, 『一般言語学講義』, 岩波書店
- H. A. スリュサレヴァ, 1989[1979], 谷口勇訳 『現代言語学とソシユール理論 改訂版』, 而立書房
- 立川健二, 1986, 『《力》の思想家ソシユール』, 風の薔薇
- 時枝誠記, 1940, 『国語学史』, 岩波書店
- 2011[1941], 『国語学原論 上』, 岩波書店
- 2011[1941], 『国語学原論 下』, 岩波書店
- 1950, 『日本文法 口語篇』, 岩波書店
- 1954, 『日本文法 文語篇』, 岩波書店
- 2008[1955], 『国語学原論 続篇』, 岩波書店
- 1957, 『国語学への道』, 三省堂
- 1957, 「服部四郎教授の『言語過程説について』を読む」, 『国語国文』 26(4), pp.230-235, 中央図書出版社
- 1951, 「言語の社会性について--大久保忠利氏の「言語過程観批判の序説」に対する答をも含めて」, 『文学』 19(9), pp.75-84, 岩波書店
- 1965 「言語過程説の成立とその展開」『国語学』 (60), pp.47-54, 国語学会
- 1950 「佐藤喜代治氏の「言語過程説についての疑問」に答へて」『国語学』 (4), pp.70-74, 国語学会
- Koerner, E. F. K. (1973) *Ferdinand de Saussure: origin and development of his linguistic thought in Western studies of language: a contribution to the history and theory of linguistics*, Braunschweig: Vieweg